

「あなたの罪は赦された」
マルコ2:1-12

22.10.30 平吹光太

本日の箇所はイエス様に病気を治して頂いた人のお話です。この人は病気が癒やされただけでなく、もっと素晴らしい恵みをイエス様から頂きました。そのことを中心に共にみことばから教えられたい。

I. みことばを語る

「数日たって、イエスが再びカペナウムに来られると、家におられることが知れ渡った。それで多くの人が集まったため、戸口のところまで隙間もないほどになった。イエスは、この人たちにみことばを話しておられた。」(1-2節)

イエス様はメシヤ(救い主)としての公の生涯を始められてから、癒しや悪霊を追い出す働きの評判が広がり、イエス様の周りには人だかりができる程の人気になっていた。

イエス様がカペナウムの恐らくペテロの家に戻って来られると、そのことが知れ渡り、家の玄関まで大勢の人達でいっぱいになった。ほとんどの人達はイエス様の奇蹟を見たいと集まったが、イエス様は人々にみことばを語った。イエス様がこの世に来られた目的は福音(罪の赦し、永遠のいのちと神の御国の到来)を宣べ伝え、一人でも多くの人々が信じて救われるため。

II. 彼らの信仰

「すると、人々が一人の中風の人を、みもとに連れて来た。彼は四人の人に担がれていた。彼らは群衆のためにイエスに近づくことができなかつたので、イエスがおられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に『子よ、あなたの罪は赦された』と言われた。」(3-5節)

イエス様が家の中で人々にみことばを語っていると事件が起きる。4人の人が中風の人を担架のような物に乗せてイエス様のところに連れて来た。中風とは脳内血管のトラブルで身体に麻痺が起きる症状。半身不随または全身不随で、自分の力だけでは歩けず人の助けを借りて生活をしていた。

そのような中風の人々の親族または友人達はイエス様の癒しの奇蹟を知り、イエス様なら癒してくれると信じ連れて来た。しかし家の中に入れぬ程の人だかりであった。けれども彼らはあきらめずに屋上に上がり、屋根に穴を開け、中風の人を担架に乗せたままつり降ろした。

日本のしっかりした造りの家を想像すると難しいが、当時のイスラエルの家の屋根は簡単な造り。家の横には屋上に行ける階段も付いていた。そのため、4人の人が中風の人を担いで、屋根に上り穴を開けることができた。比較的簡単に出来たとはいえ、彼らが人の目や、訴えられて捕まることや、修理代等を気にせず、それでも諦めずに行動することができたのはイエス様ならきっと癒してくれるという信仰があったから。

一方、家の中では天井に穴が開き、泥や藁が落ち、そして中風の人がつり降ろされてきた。イエス様のお話どころではなかつた。しかしイエス様は非常識な行動をした彼らに大切なお話の邪魔をされても怒ることなく、むしろイエス様はこの4人の行動に、「彼らの信仰を見た」と言われ、さらに「中風の人々の罪は赦された」と言われた。もちろん罪の赦しを受ける事は本人と神様との間の事ですから、イエス様が言われた「彼らの信仰」の言葉に含まれている中風の人々の信仰が第一。

しかしここで私達に教えている事は4人の信仰、つまり私達が家族、友人、知人に救われて欲しいと願う信仰の熱意をイエス様は見えておられ用いてくださるということ。中風の人だけではイエス様のところに行くことは難しかったが、4人の人達や周りの人達の祈りと行動によって一人の人がイエス様のところに行くことができた。同じように、私たちも、多くの人達の祈りによってイエス様のところに行くことができたように、一人の人が教会やイエス様のところに行けるように祈り、示された時に行動させて頂きましょう。主は私達の信仰を用い、救われる人を導かれる。

III. あなたの罪は赦された

「イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に『子よ、あなたの罪は赦された』と言われた。」(5節)
群衆は癒しの奇蹟を期待していたがイエス様が中風の人にされた事は罪の赦し。なぜ中風の癒しではなく罪の赦しをされたのか。

当時、罪と病気は結び付け考えられていた。そのため中風の人々は自分の体が麻痺したのは自分の罪のせ

いだと考えていた。私達人間は特に重い病気になると死と罪の事を意識するのではないだろうか。イエス様は人の心の中をご存知のお方であり、中風の人が罪悪感に苦しんでいたことを知っておられた。そのため、その中風の人にイエス様は体の癒しよりも罪の赦し(神との和解、神との平和な関係の回復)を宣言された。つまり体の病気は今ある肉体を滅ぼしても永遠の地獄に向かわせるものではないが、罪は人を永遠の地獄へと向かわせるものであるため最も重要な罪の赦しをされた。

私達は自分の人生を振り返る時、特に非難されるところなく、正しく生きてきたと自信を持って言えない自分がいるのではないか。周りの人にはバシてはいないが隠し続けてきた数えきれない罪(後ろめたい習慣、大切な人を傷つける、怒りをぶつける、陰口、不適切な発言など)を過去だけではなく、今も意思に反して行ってしまう自己中心の自分がいる。

聖書は全ての人は罪人だと記す。罪は神を神とせず各々が自分勝手な生き方をすること。その結果、正しく歩めず、不本意な歩みになる。愛したいと近づいても傷つけ合い、ゆるし合うことができない。私達はこのような罪の性質を持って生きている。普段は隠されていても、苦難や試練の時に向き合わされるのは自分自身の罪の問題。罪は突然中風や病気になるように自分ではどうにもできないもの。

しかしイエス様はそのような私達の罪を赦し救うために来てくださった。私達は皆、罪を赦して頂く必要があり、赦されて初めて人を赦すことができ平安のうちに歩むことができる。私達が心から罪を赦して欲しいと神に祈り願うなら、イエス様は「子よ、あなたの罪は赦された」と言ってくださる。中風の人は重い病によって死を意識する中で自分自身の罪に向き合い気づかされ、自分ではどうすることもできない滅びに至らせる罪を赦してくださいとイエス様に心から祈り願ったはず。その心にイエス様は罪の赦しを宣言してくださった。隠せばバシないと思っている罪をそのままにするのではなく、罪を神に(必要な時には人に謝り)悔い改め、赦しを頂き、いつも平安に満たされて歩ませて頂こう。

「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」(1ヨハネ 1:9)。

IV. 律法学者の信仰

「ところが、律法学者が何人かそこに座っていて、心の中であれこれと考えた。『この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。』彼らが心のうちでこのようにあれこれと考えているのを、イエスはすぐにご自分の霊で見抜いて言われた。『なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを考えているのか。』(6-8節)

律法学者達が心の中で思ったことは一見正しいように思える。しかし彼らの問題点は人として来られたイエス様こそ神であるという真理を悟っていなかったことと、病める者へのあわれみに欠けていたこと。当時のユダヤ人達は奇蹟を通して、メシアである「しるし」を求めていた。それ故、彼らはイエス様が中風の人を癒すのではなく、「あなたの罪は赦された」と言って人を誤魔化し、神をけがす者であると考えた。イエス様は彼らの心を見抜いてこう言われます。

「中風の人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。しかし人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」(9-10節)

これは、イエス様ご自身がメシアであり、罪を赦す権威を持っていることを彼らに悟らせるための問い。律法学者達にとっては罪の赦しの宣言の方が易しいと思っていた。なぜなら罪の赦しの宣言は罪の赦しが実際になくても言葉だけで済むが、病の癒しの宣言は実際に癒す力を持っていないとできないため。しかし実際、罪を赦すことは神と神の権威を持っているメシア以外には誰にもできないことである。

「そう言って、中風の人に言われた。『あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。』すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、『こんなことは、いまだかつて見たことがない』と言って神をあがめた。(10-12節)

イエス様はご自身がメシアであり、神ご自身であり、罪を赦す権威があることを癒しの奇蹟によって証明された。このイエス様の癒しの奇蹟は頑なな律法学者達を悟らせるためのものであり、そして何よりも中風の人へのあわれみを現している。私達は、律法学者達のように目に見える奇蹟を見なければ神を信じないのではなく、中風の人と4人の人達のような信仰(イエス様以外に救いはない)をお与えくださいと心から祈り求める者とさせて頂きましょう。